廿日市市の成り立ち。

廿日市市域には、旧石器時代までさかのぼる長い歴史があり、日本史の舞台にも幾度か登場してきました。合併前の歴史の中から、いくつかのエピソードをご紹介します。

厳島合戦図（6枚一式）

厳島神社と平清盛

●廿日市市域には旧石器時代から人が住んでいたとされ、冠山からは安山岩の石器が発掘されています。縄文時代には瀬戸内海沿岸部に人が住みつき、漁や狩りで生活をしていました。伝承によれば、厳島神社は佐伯鞍職（くらもと）が五九三年に創建したとされています。律令時代には古代山陽道の駅が平良と大野に置かれ、速谷神社は安芸国でも最高の社格を誇る神社だったとされます。

●平安時代後期には、平清盛をはじめ、平家一門が厳島神社を深く信仰したため、一一六四年には国宝の「平家納経」が奉納され、一一六八年に社殿が廻廊によってつながる、現在のような壮麗な姿に造営されました。清盛の参詣は記録に残っているだけで十回を超え、後白河法皇や高倉上皇も参詣されています。

厳島合戦と桜尾城

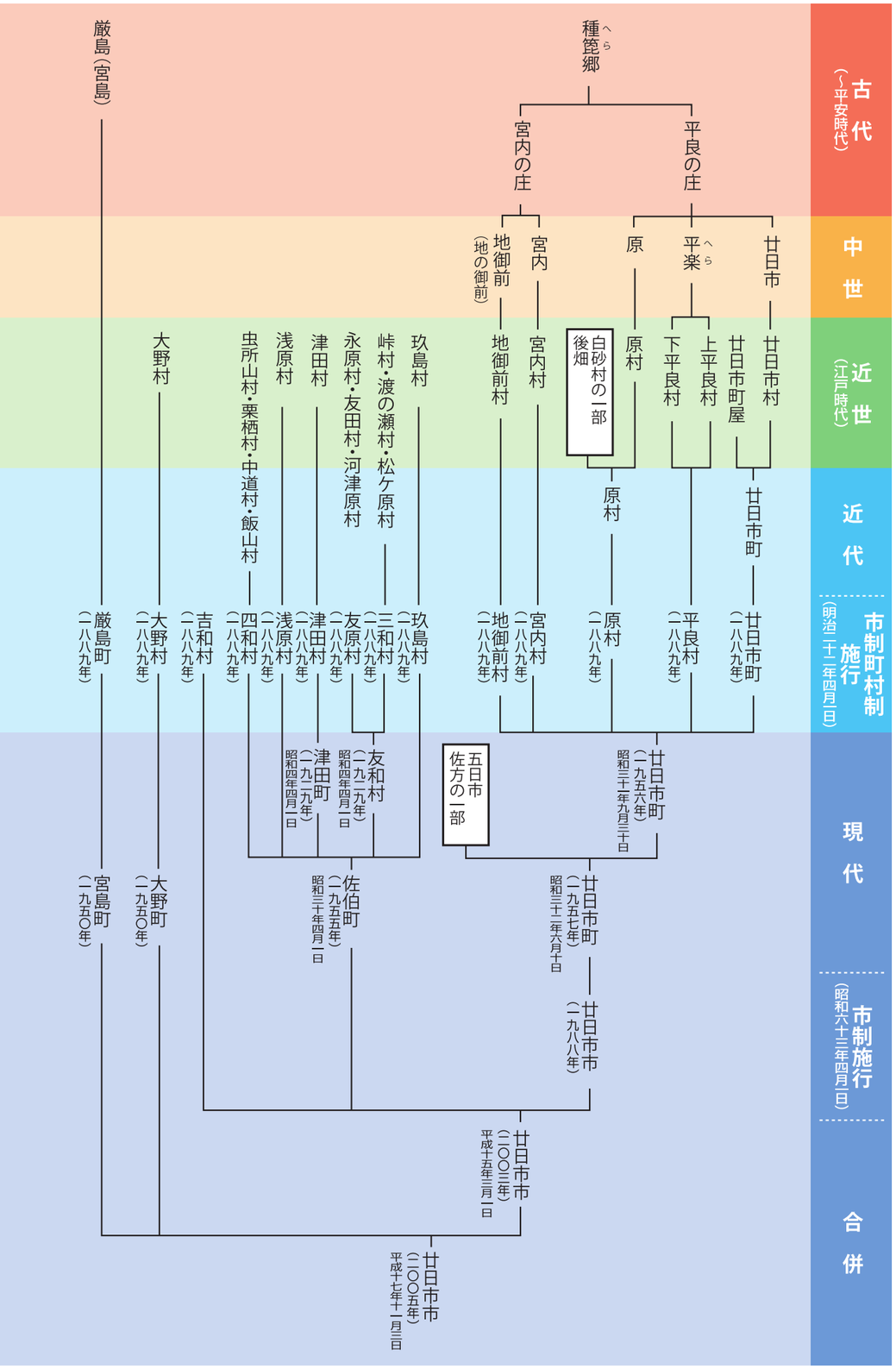
●廿日市という地名が初めて記録に登場するのは、室町時代中期の一四五四年のことです。当時、廿日市ではすでに周辺から物資を集めた定期市が開かれ、商人や職人が居住しており、また厳島神社の藤原姓神主家の居城、桜尾城の城下町としても大いに賑わいました。

●戦国時代になると、藤原家は大内義隆に滅ぼされ、その義隆も陶晴賢（すえはるかた）の謀反により自害すると、一時桜尾城や町域は陶氏の支配下となりました。しかし、毛利元就が奇襲戦として名高い「厳島合戦」で晴賢を破ると、毛利氏の領地となり、重臣の桂元澄や四男の穂田（ほいだ）元清らが城主を勤めました。しかし、関ヶ原の合戦で敗れた毛利氏が萩に移ると、桜尾城は廃城されてしまいました。廿日市の洞雲寺には、晴賢や元澄、元清らゆかりの人物の墓碑が建立されています。

長州戦争と残念さん

●江戸時代の廿日市は、西国街道や津和野街道の宿場町、海上交通の要衝として繁栄しましたが、幕末の動乱に巻き込まれます。一八六六年に長州戦争が起こると、廿日市は幕府軍の陣地となり、長州軍の進軍を妨害するため、町に火が放たれたのです。

●この時、戦いの最前線となった大野に伝えられている歴史の悲話が、「残念さん」です。和睦を伝えようとした幕府軍の軍使を、長州軍が戦闘員と見誤って狙撃してしまい、軍使は一言「残念！」と叫んで倒れ、亡くなったといわれています。土地の人々が、その壮烈な戦死を悼み、祠を建てて奉ったのが、今も山陽自動車道大野インターチェンジの近くに残されている「残念さん（残念社）」の由来です。

厳島社頭之図

平清盛像